



アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳 注(14)

真下, 裕之
二宮, 文子
和田, 郁子

(Citation)

神戸大学文学部紀要, 53:19*-45*

(Issue Date)

2026

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503527>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503527>



アブル・ファズル著 『アーイーニ・アクバリ』訳注 (14)

真下 裕之 監修
二宮 文子*、真下 裕之、和田 郁子** 訳注

<I, 146>

ラクダ舎の規則

世界の王は、物心がついた時¹から、この驚くべき姿の生き物に大いに心を傾けていた。この生き物が【帝国の】三つの【部門の】²繁栄全ての支えであり、荷を運び少し【の餌】で満足することを快く思い、好意を増大させた。この繁栄した国土では、体格の良い選りすぐりが出現しており、トゥーラーンやイーラーンのラクダよりも抜きん出ている。【アクバルは】いつも、自らの後宮の帳を飾るために、また他の人々を楽しませるために、この生き物の試合を催す

* 青山学院大学文学部教授

** 岡山大学学術研究院社会文化科学学域准教授

1 ‘unfuwān-i āgāhi. *Akbar Nāmah* 中にも、Akbar が子供の頃にラクダに興味を持っていたという記述が見られる [AN: I, 317-318]。Blochmann は、この部分を「国事 (the affairs of the state) に注意を払い始めた時」と訳している [AA (Etr.): I, 151]。 (N)

Humāyūn がイランから帰還し、Kābul を手中に収めた頃、少年 Akbar はラクダに乗ることとラクダの組み打ちに関心に向けたという。この逸話は、その他に馬の騎乗、犬を使った狩りに勤しんでいた王子が、その後インドにおいては象の騎乗と組み打ちに専心するようになったとの説明の前置きとなっている [AN: II, 71]。 (M)

2 三つの部門とは、本書で扱われている帝国の宮廷、軍隊、税務を指す。このような表現は本書の他の箇所にも見られる [AA (Jtr.) (1) : 84]。 (N)

こともあり、常によりすぐりの何頭かをそのために待機させている³。御用のラクダたちの筆頭は「シャー・パサンド」⁴という名前の12歳の御館生まれであり、並いるラクダたちの中で優位を示し、組み打ちにおいて格闘の妙技を見せている。

ラクダはアジメール、ジョードプル、ナーガウル、ビーカーネール、ジャイサルメール、バティンダー、バトニールの付近に多く⁵、またグジャラート州の

3 ラクダ試合はムガル帝国時代以前から行われていた。Timūr朝時代の画家Bihzādが描いたラクダ試合の絵画が、Gulshan Album (Muraqqa‘-i Gulshan) に収録されている [Rajabi 2005: 428-429]。Bāburは、1528年末に開いた祝宴の余興としてラクダ試合を行わせている [BN: 563 (352a) ; BN (Jtr.) : 561]。Ġahāngīr 宮廷を訪問した Muṭribī Samarqandī は、君主の御前で夜間に行われたラクダの組み打ちについて言及している [NZJ: 290]。なお、前述の Bihzād の絵画をもとに、Humāyūn と Akbar に仕えた画家 ‘Abd al-Ṣamad と、Jahāngīr に仕えた画家 Nānhā がラクダ試合の絵画を作成している [Natif 2018: 75-79]。‘Abd al-Ṣamad の絵画はメトロポリタン美術館のHP で閲覧可能である (<https://www.metmuseum.org/art/collection/search/76194>)。 (N)

Nānhā の絵画も Gulshan Album の一部をなしており、絵画に付された Ġahāngīr 親筆の注記により、この画家がヒジュラ暦 1017 年 (1608/9)、Bihzād の原画を見て模作を作成したことが知れる [Rajabi 2005: 430-431]。これら3点の絵画はむろん、ムガル帝国宮廷の絵画に及んだイラン画風の影響を反映するものではあるが、後代の Nānhā の写しがむしろ原画に忠実で、Akbar のもとで活動したイラン出身の画家 ‘Abd al-Ṣamad の作品の方が「Fatehpur-Sikri におけるアクバルの書院を特徴づける実験への多大な意識」をうかがわせるという美術史家の見立てがある [Brand & Lowry 1985: 92]。ラクダは、本文が説明する輸送用、試合・鑑賞用のほか、まれに乗用にも供されたようである。1573 年、Akbar は Guḡarāt 遠征に際してラクダに騎乗したとの所伝がある [ZNA: 140-141]。またラクダを入手しやすい状況で、馬の代用とされたと考えられる場合もある (逃避行中の Humāyūn が Sind 地方から Qandahār に向かった際 [HN: 63-64; HN (Jtr.) : 121-122])。なお Akbar 治世よりも後の時代に、ラクダに搭載する火炮 šutur-nāl が登場したことについては、本訳注においてすでに言及した [AA (Jtr.) (10) : 82, n. 92]。なお同注にあるとおり、šutur-nāl の使用は Ġahāngīr 時代の史料に確認できるとし、Šāh Ḡahān 治世初頭の北インドを旅した英人 Mundy も君主の部隊に所属するラクダが火炮を装備していたことを伝えているので [Mundy: II, 190]、この火器の使用の初例が 1658 年の Samūgarh の戦であるという説は誤りである [Roy 2014: 73]。 (M)

4 Šāh-pasand. 「王のお気に入り」という意味である。この名を有する Akbar 御用のラクダについては関連史料に見出すことができなかった。なお、君主 Šāh Ḡahān が騎乗した馬が同じ名を有していたこと [BWN: 255v] や、同じ君主が騎乗した象には Pādšāh-pasand という名が与えられていたこと [BNL: II, b, 246] を考慮すると、この種の名は君主御用の軍用動物に頻用されるものであったと推測できる。 (M)

5 これらの地名のうち、前者 6ヶ所は Akbar 時代の Aḡmīr 州、後者 2ヶ所は Dihli 州に属する。現在の行政区分では、Bathindā が Punjab 州、それ以外は全て Rajasthan 州に含まれている。 (N)

カッチの付近でも良いラクダを多く産する⁶。スインドではあらゆる場所よりも【ラクダが】多く、1万頭以上を所有している人々も多数いる⁷。足の速さではアジメールのラクダが、多くの荷を運ぶことではタッタ【のラクダ】が名高い。

この部門の元手はアルワーナ⁸、すなわち雌のラクダである。どの地域でも冬に盛り (*masti*) を起こし、雄と交わる。雄がふたこぶの場合、ブグル⁹と呼ばれる、その仔はナルあるいはマーヤと呼ばれる¹⁰。世界の王はナルをブグディー¹¹、

6 これらの地名のうち、Kačchについてはラクダと山羊が多く生息しているという記述が見られる [AA: II, 492]。(N)

7 Sind州にラクダが多いとされているのは、Qandahār経由でインド西北部とイラン南部や中央アジアを結ぶ交易路における主要な荷運び用の駄獣がラクダであったことに起因すると推察される [家島1991: 231]。(N)

HumāyūnがSind地方からイランに亡命するべくQandahārに向かった際には、多数のラクダを徴発した [HN: 63-64; HN (Jtr.): 121-122]。また17世紀初頭にインドからイランに陸路で向かった英人Steelは、Qandahār経由でイランに向かうキャラヴァンの主たる荷駄がラクダであったことを伝えている [Steel: 270]。(M)

8 arwānah. Bullietは、アラビア語、ペルシア語、アナトリアのトルコ語、トルクメンのトルコ語、キルギズのトルコ語、モンゴル語において、さまざまな交配で産まれるラクダのそれぞれを指す語彙をまとめた表を作成している。その中では、ペルシア語や、トルクメン、キルギスのトルコ語で、雌のヒトコブラクダがarvāna、あるいはarwanaと呼ばれるとされる。また、ペルシア語やキルギスのトルコ語ではヒトコブラクダと、ヒトコブとフタコブの交配の間に産まれたラクダもarwanaと呼ばれるとされる。ただし、ペルシア語の用法については本書のこの部分が根拠とされている可能性が高い。現在のイラン北部やアゼルバイジャンに居住する遊牧民の間でも、雌のヒトコブラクダがarvanaと呼ばれている [Bulliet 1975: 144-145; Tapper 2013: 153]。(N)

9 buğur. Bullietは、フタコブラクダを指すペルシア語あるいはアナトリアのトルコ語の語彙、Blochmannは、バクトリア種のラクダ (フタコブラクダ) を指すトルコ語の語彙としている。Oleariusもフタコブラクダをこの呼称で呼んでいるという [Blochmann 1868: 59; Bulliet 1975: 144-145; Tapper 2013: 153]。フタコブの雄とヒトコブの雌の交配は、中央アジアからアナトリアまで広く見られ、その歴史は紀元前まで遡る [Potts 2004]。この交配の結果産まれるラクダはプフティー種と呼ばれることもあり、プフティー種は本テキストに既出である [AA (Jtr.) (10) : 61]。なお、プフティー種には繁殖能力がない、あるいはプフティーとの交配で生まれるラクダは体が弱く家畜としての有用性が低いとされる [Bulliet 1975: 144-145; Pellat EI2: Ibi]。(N)

10 Bullietの表では、トルクメンやキルギズのトルコ語において、ヒトコブとフタコブの交配で産まれるラクダがnerあるいはnarと呼ばれ、アナトリアのトルコ語ではmāyaと呼ばれるとしている [Bulliet 1975: 144-145]。17世紀のアゼルバイジャンにおいてブグルとヒトコブの雌の交配で生まれたヒトコブラクダがnerと呼ばれていた、あるいは、19世紀のシリアにおいて雄のフタコブと雌のヒトコブの交配種がmayaと呼ばれていたという記録もある [Potts 2004: 157; Tapper 2013: 153]。(N)

11 buğdī. PlattsとShakespeareは高価なラクダの一種とする。Blochmannはヒトコブラ

マーヤをジャンマーザ (*ġammāzah*) と名付けた。荷運びや組み打ちのために
はブグディーが最も力強く、速く走るにはジャンマーザである。ルーク¹²と呼
ばれるヒンドのラクダとアルワナは、足の速さにおいてはジャンマーザに匹
敵するほどで、<I, 147>それよりも速いものもいる。ブグルがジャンマーザと
つがいになったら、雄の仔はグルド (*ghurd*) (ペルシア語のカーフとハーの
ダンマ、ラーのスクーン、ダール) と、雌はマーヤ・グルドと呼ばれる。ブグ
ディーあるいはルークがジャンマーザとつがいになっても、【その仔は】雌雄
いずれも上と同じ名称になる。【ブグディーあるいはルークが】アルワナと
つがいになったら、雄の仔は父の名称で、雌の仔は母の名称で呼ばれる。ルー
クはグルドとマーヤ・グルドよりも原種に近い (*aṣīl-tar*)¹³。

ラクダは、荷運びや移動するときには5頭ずつで隊列を作ることが多い。
先頭は「先頭」(*piš-ang*)、二番目は「鞭前」(*piš-dirrah*)、三番目は「列中」
(*miyānah-qaṭār*)、四番目は「後ろ手」(*dum-dast*)、五番目は「^{しんがり}殿」(*dum-dār*)
と呼ばれる¹⁴。

クダとする。なお、英訳には *buḥṭi* の転訛という Phillott による注が見られるが、テ
キストの他の部分でプフティー種が登場しており、この可能性は低い [AA (Etr.): I,
151; Shakespear 1834: 261a; Blochmann 1868: 59; Platts 1884: 158b]。(N)

¹² *lūk*. Bulliet は雄のヒトコブ、あるいはヒトコブと、フタコブとヒトコブの交配種
の間に産まれた雄を指す語彙とする [Bulliet 1975: 144]。Olearius はヒトコブラク
ダの一種を *lohk* (*lök*) と呼んでおり、他のヒトコブラクダよりも劣っているとして
いるという。また、現在のイラン北部からアゼルバイジャン地方に居住する遊牧民
Shahsevan の間では、雄のヒトコブラクダが *lök* と呼ばれているという [Tapper 2013:
153-154]。ペルシア語辞書によると、毛が少なく荷運びに適したラクダ。Steingass は
lok と転写している。ここで *lūk* が「ヒンドのラクダ」とされている理由は不明である
[Steingass 1892: 1132b; Anwari 1381 Sh.: VII, 6467]。(N)

¹³ 英語訳はこの語を *superior* と訳している [AA (Etr.): I, 151]。(N)

¹⁴ ラクダを5頭ずつの隊列 (*qitār* / *qaṭār*) に編成する慣行は、アラビア語圏にも見ら
れる [堀内 2015: 115-116]。(M)

【ラクダの】飼料の規則

群れ¹⁵から選ばれた、荷運び用のブグディーの2歳半と3歳には2スィールの穀粒【が与えられる】。3歳半から4歳は5スィール、それ以上7歳までは9スィール、8歳は10スィールであり、ブグルも同様である。ジャンマーザ、グルド、マーヤ・グルド、ルークは、4歳までは【ブグディーやブグルと】同じだが、それ以上7歳までは7スィール、8歳は7.5スィールである。【以上は】1スィールが28ダームだった時のことであり、【1スィールが】30ダームである現在、その差分が減らされている¹⁶。盛りの時にはブグディーは穀粒を食べる量が減るが、パオ・ゴシュト¹⁷の規則に従って、【通常と】同じ10スィールを得る。【発情期で食べる量が】減った分は、ダルガが通常の時期に食べさせる。一方、【発情による体重減少を】日誌に記載しており、【後日】多めに食べさせる場合には、パオ・ゴシュト【として留保された経費】によって実施する。他の事情で、パオ・ゴシュトによる差し引き分【として留保された経費】によって【給餌する量を】計算する場合も同様である¹⁸。御前においては、8ヶ月の間は宮廷

15 **gallah**. この語が飼育のために管理されている群れを指すことについては訳註 (13) を参照 [AA (Jtr.) (13) : 10, n. 38]。 (N)

16 スィールの重さの変遷については、[AA (Jtr.) (1) : 100, n. 51]。 (N)

17 パオ・ゴシュト **pāw-gūšt** については本書に既出であるが [AA: I, 140; AA (Jtr.) (12) : 21, n. 94]、これが、飼育下の動物の体重減少とその原因となった管理不行き届きに対する罰金という体裁で、担当官の手当もしくは経費の減額措置として運用されていたことについては、本書の後出箇所でも説明されている [AA: I, 163-164]。但し、本文のこの箇所は、結局のところ減額が行われないことを説明しているのもので、**pāw-gūšt** の減額措置が、もっぱら担当官の不行き届きに対してのみ適用されるものであり、発情期のごとく、それ以外の理由によって体重減少が生じた場合には、措置が適用されないことが何らかのかたちで規則に盛り込まれていた可能性がある。本文が「規則に従って」と記しているのは、この前提があるためかもしれない。但し後出する **pāw-gūšt** の規則に関する記事には、かかる除外規定は説明されていないので、上記はあくまで推測にとどまる。なお **pāw-gūšt** の語は、Richardson の辞書の初版 (London, 1777) には立項されていないが、Wilkins の改訂と Johnson の増訂を経た新版には「牛を世話を怠ったことに対する罰金」という語釈がある。[Richardson 1829: 319a]。 (M)

18 この文は難解であり、本文の言葉のみでは十分な解釈を導けない。上記の訳文は、**pāw-gūšt** が、体重減少を来した動物の管理官に対する手当の減額措置であることを前提に、語句を補って訳出したが、あくまで暫定案である。 (M)

から飼い葉を得る。都市の中に輪番 (kišik) で留め置かれているラクダは、そのために1日2ダーム【相当の飼い葉】¹⁹を得る。都市の外にいたるものは1.5ダームである。雨季の4か月や旅やその他の場合は与えられず、ラクダ使いたちが草地に連れて行って済ませる。

御用の【ラクダの】装備²⁰は、おもがい (afsār)、しりがい (dum afsār)、鼻木 (mihār)、カーティー²¹ (カーフ、アリフ、ヒンド語の上双点付きターと隠れたハーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン) である。カーティーは【馬用の】鞍 (zīn) に似ているが、それよりも少し長い。世界の主たる御方が考案されたものである。またクーチャー²² (カーフのダンマ、ワーウのスクーン、ペルシア語のジームのカスラ、下双点付きヤーのスクーン) は、鞍下の役割を果たす。【さらに】カタールチャ²³、SRBČY²⁴、胴帯、頭帯²⁵、下帯²⁶、首鈴、首帯【がある】。三枚覆い (sih-čadur) は、毛織物、色付きの厚手の布、蠟引き布でできている。これらの装備を飾るために、宝石、宝飾品、上等の布や絹布が取り

19 飼料の支給量について、「某金額相当」という表現が行われることは、馬の飼料に関する本書の記述と同様である [AA (Jtr.) (13) : 8, n. 31]。 (M)

20 底本は行を改めて、「装備の規則」 ā'in-i raḥt という節題としてテキストを作るが、A写本、C写本はいずれも「規則」 ā'in の語を欠いている。本訳注では写本のテキストに従い、この箇所であらたな節が始まってはいないものとして読んだ。 (M)

21 kāthi. 後続の文が説明するとおり、これがインド特有のラクダ用の鞍であることは Platts のヒンディー語辞書も説明している [Platts 1884: 798b]。 (M)

22 kūči. Platts のヒンディー語辞書には採録されていない語彙であり、詳細は不明である。 (M)

23 qaṭārčah. 管見の限り、諸史料には用例を見いだせず、この装具の実態は不明である。この語は字義上「小さな隊列」と解せるが、これがいかなるラクダ用装具を指したもののか、判断の材料は無い。英語訳はこの語をいかなる根拠によってか、qaṭārchi との転写を示すが、その語義については説明していない [AA (Etr.) : I, 153]。 (M)

24 この語形では妥当な語義を見いだせないが、諸写本のテキストも有意の異文を呈さない。ことによると sar-piči と読み、「ターバン飾り (sar-pič) のような (装具)」と解せるか。なお英語訳はこれを "sarbchi" と読んでいるが、「意味は定かでない」としたうえで、「キルトの一種」との推測を示すにとどめている [AA (Etr.) : I, 153]。 (M)

25 sar-tang. 胴帯 (tang) に対して、頭部に何らかの形で装着させる帯かと考えられるが、辞書には在証できない。英訳は a head-strap と解釈している [AA (Etr.) : I, 153]。 (M)

26 šib-band. šib は「下部、下方」を意味するので、尻の方に装着した帯を意味するか。英訳も a loin-strap と同様の解釈を示している [AA (Etr.) : I, 153]。 (M)

付けられるものについては、その価格を説明し尽くすことはできない。

装備を整えたラクダ5隊列が、陛下の御騎行に備えることとなっている。【さらに】2頭が、輿を運ぶために備えられている。これは心落ち着く木製の^{たか}高座^{くら}²⁷であり、2本の支え棒を備えている。騎行の際には【これを】2頭のラクダに【渡して】、輿を吊り下げる²⁸。

【ラクダの装具は】色付きのものと色無しのものがある。10隊列あれば、3隊列を色付きとする。

【色付きの】ブグディー【の装備に要する経費】は225.75ダームである。【その内訳】貝殻を縫い込んだおもが^い20.5ダーム。真鍮製の環1.5ダーム。鉄製の鎖4.5ダーム。頭飾り²⁹ 5ダーム。背飾り³⁰ 8ダーム。しりが^い1.5ダーム。<I, 148> 鞍敷布とSRBČYには5スィールのフェルトを用いる。20ダーム。胴衣68ダーム。湾曲加工された(kunġ-kārī)鞍はカーティーとして用いられる。40ダーム。胴帯と下帯と喉もと帯24ダーム。荷物を縛るための縄。ラクダ使いたちはこれを「強縄(ṭāqah-ṭanāb)」や「荷の山(ḥarwār)」と呼ぶ。38ダーム。上掛け15ダーム³¹。【色付きの】ジャンマーザに対しては、二つの物品が追加される。首帯2ダーム。胸帯16ダーム。

残りの色無しの7隊列について。ブグディーもジャンマーザも【装備に要する経費は】168.5ダームである。【その内訳】貝殻を縫い込んだおもが^い10ダーム

²⁷ čūbin-kāḥ. この語は本書に既出である [AA: I, 41, 49; AA (Jtr.) (3): 117, 144]。 (M)

²⁸ 前後二頭のラクダに差し渡された木材によって支持される輿がAkbar Nāmahの写本挿絵に描き込まれている (Victoria and Albert Museum, IS.2:18-1896)。本文の「木製の高座」はこれにあたるのかもしれない。 (M)

²⁹ kalgi. 語釈はPlattsによる [Platts 1884: 843a-843b]。英語訳はこれを kallagiと読んだうえで、その形状を「薔薇飾りの形をした装飾品で、普通は孔雀の羽で作られており、中心に石を配する」と説明している [AA (Etr.): I, 153]。 (M)

³⁰ pušt-pūzi. Steingassは「しりが^い」crupperとの語釈を示すが、既出箇所「しりが^い」と訳したdum afsārとの違いは定かでない [Steingass 1892: 252a]。本訳は、英語訳の「背中に沿って通されるストラップのための装飾品」との説明に従った [AA (Etr.): I, 153]。 (M)

³¹ 以上、ブグディーに対する装備の経費の和は246ダームとなり、段落冒頭の「225.75ダーム」という説明と齟齬を来す結果となっている。 (M)

ム。しりがい0.5ダーム。鞍16.5ダーム。胴衣52.5ダーム。胴帯と下帯と喉もと帯24ダーム。強縄37.5ダーム。上掛け28ダーム³²。

ルークについては143ダーム。【その内訳】おもがいと鞍と「荷の山」は前項のとおり。胴衣37.5ダーム。胴帯と下帯と喉もと帯14.5ダーム。上掛け28ダーム³³。

色付きと色無し【の装備】を3年に1回新調するが、鉄製の帯金と木製品はその限りでない。古い色付き装備を勘案して、1隊列につき16ダームが、色無しについては14ダームが差し引かれる。3年が経つと概算³⁴が行われ、その額の4分の1が減額される。その後、残りの10分の1を減じて給付される。

アラフィー³⁵については【装備】毎年1回新調される。お館生まれのラクダとルークについてはいずれも52.5ダーム。【前者の内訳】おもがい5ダーム。胴衣36.5ダーム。頭覆い(sar-dūz) 0.5ダーム。胴帯と下帯10.75ダーム³⁶。【後者の内訳】おもがいと胴帯と下帯は前項のとおり。胴衣45.75ダーム。頭覆い0.75ダーム³⁷。毎年、概算の4分の1が減じられて給付される。

32 以上、装備の経費の和は169ダームとなり、段落冒頭の「168.5ダーム」という説明と齟齬を来す結果となっている。(M)

33 以上、装備の経費の和は144ダームとなり、段落冒頭の「143ダーム」という説明と齟齬を来す結果となっている。(M)

34 「概算が行われ」の部分の原文は'bar-āward namūdah'である。bar-āwardという名詞は「見積もり」「概算」を意味する。さらに、後続する「ラクダ番たちへの前渡金」のくだりが示すように、この語は、給与や手当を規定の基準額によって前渡しするための「概算」をも意味した。騎兵の場合、この給付方法によって烙印の検査を経ずに給与の割り当てを得られ、観閲と烙印の後に給与額が精算されることとなっていた(詳しくは[Moosvi 2015: 215-221]を見よ)史料においては、この給付方法によって採用された騎兵がbar-āwardiと特記される場合もある[THA: 373-374; AS: III, 279; SDA: A.R. no. 969, A.R. no. 4968, A.R. no. 4982, A.R. no. 4980, A.R. no. 695]。(M)

35 'alafī. アラフィーには、帝国のラクダ舎で生まれたラクダとインド産のラクダとがあるというのだから、この語は品種とは異なる次元の類別を意味する言葉であるはずである。「干し草を食べる四足獣」との語釈もあるが[Anwari 1381 Sh.: V, 5072a]、英語訳は糧食運搬用のラクダと推定している[AA (Etr.): I, 154]。管見の限り、諸史料にはラクダの類別としてのこの語の用例を見いだせず、確実な判断はできない。(M)

36 以上、装備の経費の和は52.75ダームとなり、段落冒頭の「52.5ダーム」という説明と齟齬を来す結果となっている。(M)

37 以上、装備の経費の和は62.25ダームとなり、段落冒頭の「52.5ダーム」という説

帆布製の袋。穀粒を食べさせるために、各隊列に一つが割り当てられる。ブグディーとジャンマーザについては30.75ダーム。ルークについては24.5ダーム。

長らく上記の価格で経費の概算が行われており、ラクダ番たちへの前渡金として割り当てられていた。しかしイラーヒー第42年³⁸、この集団の一部が損失を被っている旨、御聴聞に達した。そこでこの価格が撤廃され、市場の価格が適用された。これは【価格の】違いをもたらしうる。

ノウルーズの始まりにおいては、ラクダ使いがラクダたちに対して、毛を刈ったり、油を塗り込んだり、油を注ぎ込んだり、アラフィーの装備を整えたりすることについて、御指示を受けることになっている。

【ラクダに】塗油し、鼻に注油することの規則³⁹

【塗油と注油は】書き言葉では、「塗り込み」(taṭliyyah) および「注ぎ込み」(taḡri') と呼ばれる。その理由とは、「塗り込み」および「吸い込ませ」(tanšiq) と呼ばれていたことである。というのも鼻に何かを注ぎ込むことが「吸い込ませ」と呼ばれるからである。

ブグディーとジャンマーザに対しては、毎年3.75スィールの胡麻油が割り当てられている。【そのうち】3スィールは塗油のためであり、0.75スィールは鼻に注ぎ込むためである。さらに0.75【スィール】の硫黄と6.5スィールの凝乳も割り当てられている。他の種類のラクダについては、0.625【スィール】の

明と齟齬を来す結果となっている。(M)

³⁸ イラーヒー第42年は西暦1597/8年にあたる。本書は1595-1596年に完成したが、著者 Abū al-Faḍl が1602年に暗殺されるまで、一部の内容がアップデートされていた。この箇所はそのことを裏付けるいくつかの記事の一つである [真下 1999: 53-54]。(M)

³⁹ この「規則」の表題について諸写本の表記は異なる。Ms. A は「規則」ā'in のみを朱字とする一方 [AA Ms. A: 70r]、Ms. B は他の箇所と同様に一行取りで表題の欄を設けているが、その欄内には「規則」の語を記すにとどまる [AA Ms. B: 70r]。Ms. C. も他の箇所と同様に一行取りで表題の欄を設けているが、その欄内には朱字で「塗り込む規則」ā'in-i mālidan の語を記す [AA Ms. C: 61v]。なお、ラクダの鼻への注油に関しては、イエメン、ラスール朝において、君主のラクダの強壮をはかるべく、油脂（ギー）を定期的に嗅がせていたという [馬場 2021: 75]。(M)

硫黄と6.5スィールの凝乳が割り当てられている。鼻に注ぎ込むものとしては0.75スィールの【胡麻】油である。かつては毎年三回割り当てられていたが、今日では一回である。

ラクダおよび【ラクダ舎の】奉仕者たちの等級⁴⁰

世界の主たる御方は、一部を隊列ごとにまとめられ、いずれの隊列もラクダ使い1名による世話に委ねられた。月給は4種あり、第1は400ダーム、第2は340ダーム、第3は280ダーム、第4は220ダームである。<I, 149>

隊列の集め方には3種ある。第1は5隊列を熟練者1名に委ねるもので、その者を「二十五隊長⁴¹」と名付けられた。その月給は720ダームであり、彼はヤーブー馬⁴²1頭を烙印に付する必要がある。彼にはラクダ使い4名が従属している。第2はこれの倍の規模であり、それを1名に委ねられた。その者を「五十隊長」と呼び、1頭の馬の上に【騎乗させた】。月給は960ダームである。彼にはラクダ使い9名が従属している。第3は100隊列を熟練者1名に監督させた。その者は「五百隊長」と呼ばれる。彼が直接に管轄するのは10隊列である。そして1隊列を除き、全ての隊列にラクダ使いが宮廷から割り当てられる。五百隊長の配下 (dāhīl⁴³) には五十隊長および二十五隊長がおり、その月給は【上述の場

40 この表題について、諸写本の表記は底本と異なる。諸写本はいずれも、一行取りも改行もほどこさず、表題の文言も朱字ではなく黒字で記す [AA Ms. A: 70r; AA Ms. B: 70r; AA Ms. C: 60v]。また「～の規則」ā'in-iの文言は底本にも諸写本にも無いが、英語訳はĀ'in 65として独立の「規則」と見なしている [AA (Etr.): I, 155]。(M)

41 ラクダの1隊列が5頭から成ることについては前述されている (本訳注22頁) [AA: I, 147]。(M)

42 yābū。本書に後出する馬の7等級のうち、第5に当たる種類の馬であり、「トルコ馬」Turkīの下位にあたるとされる。「トルコ馬」と同じ産地からもたらされるが、「トルコ馬」ほど「力強くもなく、大きくもならない」とされている [AA: I, 177]。(M)

43 ムガル帝国のマンサブ制度において、上位のマンサブダールに直属する下位のマンサブダールがdāhīl (「内部」の意) と呼ばれたことは、本書に後出するとおりである。本文の記述はマンサブダールの編制を説明したものではないが、これと同様に数値の大小で序列付けられたラクダ隊長の組織がdāhīlの運用においても同様であったことを示している。なおdāhīlを抱えることができるのはマンサブ500以上のマンサブダー

合とは】異なる⁴⁴。今日、多数の百人長⁴⁵たちがこの【五百隊長配下としての⁴⁶】任務に引き立てられている。

天幕係たちにラクダを1頭ずつ委ねた⁴⁷。また、筆の確かな書記官を任命した。さらに、熟練を要するため⁴⁸、五百隊長の職はいずれもアミールに帰した。加えて、敏腕の歩兵数名を選んだ。彼らは折に触れて【ラクダの状況を】知らせることになっており、それにより、無思慮な行いが生じないようにするのである。年に2回、雨季の始まりと観閲に付する時に、見識ある乗り手たちが太り具合と痩せ具合を確認する⁴⁹。もしも【頭数が】減少すれば、ラクダ使いがその価格を弁済し、五十隊長と五百隊長も手助けする。もし盲目になったり、跛になったりしたら、その価格の4分の1を弁済する。

ライバーリー（ラーのファトゥハ、下双点付きヤーのスクーン、バー、アリ

ルであり、かつマンサブ5000のマンサブダールの場合、抱えることができる dāhili はマンサブ500が上限とされていた [AA: I, 175]。 (M)

44 五十隊長、二十五隊長の月給は、直前の記述でそれぞれ960ダーム、720ダームだと説明されているので、この文は、両者が五百隊長の配下にある場合の月給がそれとは異なる、と説明したものと解した。(M)

45 yūz-bāši. 字義上は「百人長」を意味するテュルク語だが、本書においてはマンサブ100のマンサブダールと同義であり、後出するマンサブダールの一覧においても、この語が用いられている [AA: I, 231]。マンサブの表示は、ペルシア語の数詞に接尾辞 i を添加するのが通例であり、マンサブ100は šadi とするのが普通であって、本書においてさえ、他の箇所はこのペルシア語形が用いられる箇所がある [AA: I, 135, 175]。むしろテュルク語形 yūz-bāši が史料で用いられる例は限られている [HI: II, 107; AAB: 10r; AlmN: 1044]。なおペルシア語とテュルク語を併せた dah-bāši 「十人長」の用語もある [AA (Jtr.) (12) : 5, n. 19]。 (M)

46 五百隊長の任務そのものを指すと読むこともできるが、後続の記述において、アミールが五百隊長に充てられるとされていること、およびアミールがおおよそマンサブ500以上を保有する高位のマンサブダールを含意したことを考慮すると、マンサブ100の百人長が五百隊長に補されるとは考えにくい。(M)

47 君主 Awrangzib の行軍において、「二百頭以上のラクダ」が象、雌ラバとともに天幕の部材の運搬に充当されており、ラクダが「小さい方のテント」の部材を担当していたことについては Bernier の記述がある [Bernier: 374; Bernier (Jtr.) : 327]。 (M)

48 az kārdāni. 英語訳はこのフレーズを Akbar の熟練と解しているが、本訳注では「熟練者」 kārdān がラクダ隊列を統括する、という直前の表現に鑑み、隊列隊長の資質を述べたものと解した [AA: I, 155]。 (M)

49 ラクダをはじめとする軍用動物の肥育状況を確認するために監察官が派遣されることについては後出する pāw-gūšt の項に記述がある [AA: I, 163-164]。 (M)

フ、ラーのカスラ、下双点付きヤーのスクーン)。ヒンド生まれの人々の一部であり、この動物をよく知っている。そして彼らはヒンドのルークを、非常に長い道のりをわずかの時間で走るような俊足ラクダへと育て上げる。彼らはこの名称によって知られている。首都から国土の果てまでどれほどの距離であっても、何れの方角にも、宿駅⁵⁰が置かれており、また5クルーフごとに早駆けの歩兵⁵¹たちが配置されている。そのうえで御深慮により、これらのラクダの乗り手の数名が至高の宮廷で待機している。ライバーリー1人にアルワナー50頭ずつが委ねられる。そして繁殖のために、ブグル1頭、ルーク2頭が同伴させられる。ブグルとルークの穀粒は【既述の】規定どおりであるが、飼い葉の代金は支給されない。またアルワナー50頭は、穀粒の手当も与えられない。毎年1回、ブグル、ブグディー、ジャンマーザの【油の】塗り込みと吸い込ませのために、1頭あたり4スィールの胡麻油、0.75【スィール】の硫黄、6.5スィールの凝乳が割り当てられる。そのうち胡麻油0.75スィールは吸い込ませのためである。またルーク、アルワナー、グルド、マーヤ・グルドのためには、3.625スィールの胡麻油が割り当てられるが、その端数【0.625スィール】は吸い込ませのためである。さらに6.5スィールの凝乳、0.625スィールの硫黄が割り当てられる⁵²。ブータとダウンバーラ⁵³のためには、2.5スィールの胡麻油が割り当てられるが、そのうち0.5スィールは吸い込ませのためである。さらに0.5スィールの硫黄、4.25スィールの凝乳が割り当てられる。この二つはいずれも

50 yām. 英語訳はこの単語を「駅馬」と解しているが[AA (Etr.): I, 156]、この文脈ではラクダが配置される宿駅を指すと考えるのが適切である。ムガル帝国時代の史料には、「宿駅の馬」asp-i yāmのごとく、この語が駅馬ではなく、宿駅を意味していたと考えられる用例もある[AN: III, 195]。(M)

51 piyāda-gān. 「歩兵」piyādahがムガル帝国のなかで様々な機能を果たしたことにについては、後出する「歩兵の規則」に示されるとおりである[AA: I, 188-190]。(M)

52 既出の餌等の支給量とは異なる説明。通常のラクダ群と、ライバーリーが管理する繁殖用のラクダ群とで支給量に違いがあったことを示したものと考えられる。(M)

53 būtahは「若いラクダ」を意味する[Steingass 1892: 205a]。一方dunbālahの語義は定かでない。dunbāl「尾」の形容詞形と解し、(ラクダの序列の)「最後尾」、もしくはbūtahの類義語と見なすなら「(親ラクダの)尾を追うような」幼いラクダを意味したものかもしれない。(M)

幼いラクダである。しかし前者には少しばかりの荷も負わせる。また毎週、群れのうちの年長のラクダ一頭には0.5スィールの硝石と塩 (*šūrah wa namak*)、ブータには0.25スィールが割り当てられる。

群れ番の月給は200ダームである。ラクダを放牧するため、50頭ごとに5人が群れ番の配下に付けられる。この各人には日給2ダームが与えられる。また【繁殖用のアルワナー】50頭の群れ2つの取りまとめ役はアルワナー3頭を毎年献上することになっている。献上しない場合には【それに相当する金額が】彼の月給から減算される。

かつてはブグディー及びジャンマーザの毛は【刈り取られたうちの】4分の1が徴収されており、ラクダ1頭あたり4スィールが課されていた⁵⁴。世界の主たる御方はこれを<I, 150>免除された。そしてそのかわりに、しりがいや小型足かせ⁵⁵やそれに類するものを課しておられる。

ブグディーの価格は5ムフル以上12ムフル以下である。ジャンマーザは3ムフル以上10ムフル以下。ブグルは4ムフル以上7ムフル以下。マーヤ・ブグルは3ムフル以上5ムフル以下。グルドは3ムフル以上8ムフル以下。マーヤ・グルドとルークは3ムフル以上7ムフル以下。雑種の⁵⁶ルークは8ムフル以上9ムフル以下。ヒンドウースターン産のルークおよびバルーチが産する⁵⁷ルークは

54 英語訳と同じく、群れ全体の刈り取り量に対して4分の1を徴収すると見なして、各頭あたり4スィールを課したものと読んだ [AA (Etr.) : I, 156]。 (M)

55 ペルシア語の単語 *aškal* 「足かせ」に指小辞 *-ak* が添加された語形と解した。英語訳は「wooden pegs」と訳しているが [AA (Etr.) : I, 156]、その根拠は不明である。 (M)

56 *dū ḥallah*。この語の解釈については確証がない。英語訳は「雑種の」とし、ここではさしあたりこの案に従ったが、その根拠は不明である [AA (Etr.) : I, 156]。 *ḥallah* には「ラクダの子」の意味があるが [Steingass 1892: 470b]、*lūk-i dū ḥallah* 「2頭のラクダの子のルーク」が意味するところは不可解である。一方、*ḥall* には「乳飲みを止めさせるため、子ラクダの舌を裂くこと」の意味があり [Steingass 1892: 469b]、これに形容詞形成の接尾辞が付された語形と考えれば「二度にわたり舌裂きを施されたルーク」となる。 (M)

57 *Balūčī*。 *Balūč* は集団の呼称であるから、本文は「ヒンドウースターン産 *Hindūstānī*」という産地を示した名称と、「バルーチが産する *Balūčī*」という生産者を示した名称とを並記していることになる。 *Balūč* の居住地は史料上 *Balūčistān* と記され、おおよそイラン高原南東部、ヘルマンド川南方、およびオマーン湾に面する沿岸部にわたるが [Spooner: Etr]、 *Balūč* の人々の活動はその圏域を越えた北インドにも散見され

3ムフル以上8ムフル以下。アルワーナーは2ムフル以上4ムフル以下。

世界の主たる御方は選りすぐりのブグディーに10マンまでの荷を負わしておられ、第2等のブグディーには8マンまでとしておられる。また上等のジャンマーザとルークその他には8マンまで、第2等のものについては6マンまでとしておられる。

この国土では、【ラクダは】24年を超えて生きることはない⁵⁸。

牛舎の規則

ヒンドゥスターンの繁栄した国土ではこの動物は吉祥とみなされ、大いに尊ばれている。耕作は牛の力で行われ、生活の源は牛によって賄われ、乳、凝乳、油脂で食卓が彩られる。また、荷を運び、車輛を引けるだけの力がある。【帝国の】三つの【部門の】いずれの繁栄にとっても何よりの助力である⁵⁹。

【牛は帝国の】全土で産し、様々な種類がいるけれども、優れた牛はグジャラート州にいる。グジャラート産の牛は1対100ムフルで購入されることもある。一昼夜で80クローフ進み、歩みの速い馬を追い越すほどであり、途中で糞をすることもない。【ただし1対で】20ムフルや10ムフルの牛が大多数である。ベンガルやデカンでも上等の牛を産する。

荷積みの際には座る。【雌牛は】乳を0.5マンまで出す。デリー地方では【牛1対に】10ルピー以上の価格が付くことはないが、世界の主人たる御方は1対の牛を20万ダームで購入したことがある。チベットとカシュミールの近くに

るし、Balūčのニスバを備えた人物がムガル帝国に参画した例も史料に多数確認できる。Balūčとラクダとの関係性については、Akbarの使者としてデカンに派遣された Asad Beg の一団に200頭のラクダとともにBalūčが雇用されて同行していたとの記録が目につく [AAB: 51v-52r]。また上記のBalūčistānの東隣に当たるMultān州に属するTattah県(sarkār)の北部山地には、Akbar時代、Kalmāniと呼ばれるBalūčが居住しており、同地では良質なラクダが生産されていたという [AA: I, 556]。(M)

58 アラブ地域においては「大事に飼育されれば40年は生きる」が「厳しい自然と過酷な労役とから、平均寿命は30歳足らずだとされる」という [堀内 2024: 155]。(M)

59 「三つの部門」については、本訳注の注2を参照。(W)

はクータス牛⁶⁰がいる。驚くべき外見をしている。

この動物の生来の寿命は25年である⁶¹。

真価を認める君主は、牛の素晴らしい数々の能力についての見識によって、多くの世話をお命じになる。また、群ごとに分けて、情け深い心をもった番人たちに委ねなされる。100頭を選びすぐり、御用にされ、それをクータル⁶²と名付けられた。【クータルの群れは】常に服務に備えることとされており、狩猟に際しては、後述するように荷を積まない牛40頭が同行する⁶³。クータルに相当する等級に達した51頭を「ニーム・クータル」、またこれと同数の51頭を「パーオ・クータル」と称する。第一群【クータル】の牛が減れば第二群【ニーム・クータル】から、第二群の牛が減れば第三群【パーオ・クータル】から補充される。これら3つの群の牛舎はいずれも御用である。

【御用以外の牛についても】同様に50頭から100頭までの複数の群れに分けて、正しい性質の世話係たちに委ねなされる。牛の御観閲の折にはそれぞれの【牛の】等級が決められ、同じ等級のものが集められる。また、同様に隊に分け、車輛を引いたり、バハル車⁶⁴に繋いだり、水を運んだりさせる。

60 *quṭās* はチベットのヤクを指す [Steingass 1892: 976]。本書において *quṭās* は旗幟の一種に取り付ける房飾りの意味で既出であり、この房飾りがヤクまたは馬の尾でできていることについては [AA (Jtr.) (3) : 134, n.59] を参照。(W)

61 本書では他の動物に関する記述でも同様に寿命についての言及があることを考慮し、Blochmann にしたがって、ここでも牛一般の寿命について述べていると解する。ただし、文脈から直前のヤクの寿命として解することも可能である。なお、今日の動物学上の見地によれば、ヤクの寿命は野生および飼育下いずれにおいても20-25年とされる [Han 2014: 203]。(W)

62 *kūtal*。本来は「伴走馬」を意味する。本書では、御用の太刀や銃を補充するための予備や、事績記録管の補欠要員に対しても同じ呼称が用いられている [AA (Jtr.) (10) : 58, n. 9; 90-91]。また、後出の動物同士の試合の記述で、試合用に飼育しておくガゼルの分類において御用の群れを補充するための群れに対する呼称としてクータルおよび半クータルの語が見られる。(W)

63 ガゼル狩りの際に40頭の牛の間に狩猟者を紛れ込ませ、獲物に近づかせて狩る方法を Akbar が考案したとの記述が本書に後出する [AA: I, 210]。(W)

64 *bahal*。bahli とも言い、ヒンディー語で2頭の雄牛によって引かれるスプリングのない二輪の小型車両を指す [Platts 1884: 190b, 191b]。Deloche によると、bahali (bahli, bahal) はムガル時代のヒンドゥスターン北部で使われていた、人を乗せるための車両の一種で雄牛が引くものであるという [Deloche 1980: I, 267-268]。これにしたがって、

この動物には【小型馬の】ゲートのような種類もあり、ガイニー⁶⁵（ペルシア語のカーフのファトゥハ、下双点付きヤーのスクーン、ヌーンのカスラ、下双点付きヤーのスクーン）と呼ばれている。大そう見目形がよい。

雌の牛と水牛についても同様に複数の群れに分けられ、職務に忠実な知識の豊富な者たちに委ねられた。

【牛の】飼料の規則

この宮内作業所には、1日あたり【牛1頭につき】6.25スィールの穀粒、1.5ダーム【相当】の飼い葉、【牛舎全体で】1マンと19スィールの黒砂糖が割り当てられる⁶⁶。ダルガが【牛舎あるいは牛の】働きと状態に応じて給餌する⁶⁷。その他の御用の厩舎では6スィールの穀粒と、上記と同様の飼い葉が割り当てられるが、黒砂糖は与えられない。

御用以外の厩舎では、第一級の牛に対しては6スィールの穀粒と、君主のも

本書の既出箇所[AA (Jtr.) (4): 34; AA (Jtr.) (10): 61]の訳語「荷車」を「バハル車」に修正する。FitchはAkbar時代に多数見られた二輪の車両について、「イングランドの大型犬ほどの大きさの2頭の小型の牛に牽かれる」ものであること、絹や非常に薄い布で覆われており乗用にすることなどを伝える[Fitch: 18]。(W)

⁶⁵ gaynī はヒンディー語で小型の雌牛を指す。一方、小型の雄牛を指す語としては gaynā がある[Platts 1884: 942b, 943b]。Bābur Nāmah にも言及があり（「ギーニー牛」と和訳）、ヒンドゥスターンの「やや小さな牛」で「肉は非常に軟くうまい」という[BN: 444; BN (Jtr.): 446]。ゲート馬はヒンドゥスターン北部の山地に産する力の強い小型の馬として本書に既出[AA (Jtr.) (13): 4, n. 18]。(W)

⁶⁶ Blochmannの訳にしたがい、穀粒（重量単位スィールで換算）と飼い葉（貨幣単位ダームで換算）を割り当てる対象と、黒砂糖を割り当てる対象は異なり、前者は牛1頭あたり、後者は牛舎全体と解する[AA (Etr.): I, 158]。その理由は、割り当てられる穀粒、飼い葉、黒砂糖それぞれの量に照らしたとき、とくに黒砂糖の割当量が過大（1マン19スィールは約37キログラムに相当）であることから、より妥当と考えられるためである。ただし、この見方はペルシア語本文の記述およびその文法的な解釈に基づくものではない。(W)

⁶⁷ dārūghā farāḥwūr-i ḥidmat wa ḥāl bi-ḥwuriš dihad. Blochmannはこの箇所ではdārūghāの後にエザーフエを入れ、“which is distributed by the Dārōgha, who must be a man suitable for such a duty, and office”と訳すが[AA (Etr.): I, 158]、この解釈は採らない。(W)

とにいる場合は1.5ダーム【相当】の飼い葉が、そうでない場合は<I, 151>1ダーム【相当の飼い葉】が割り当てられる。第二級の牛には、5スィール【の穀粒】と上記と同様の飼い葉。バハル車用の牛には6スィール【の穀粒】と上記と同様の飼い葉。第一級のガイニーには3スィールの穀粒と、御前にある場合は飼い葉用に1ダームが、そうでない場合は0.75ダームが割り当てられる。第二級のガイニーには2.5スィール【の穀粒】と、御前にある場合は0.75ダーム【相当】の飼い葉が、そうでない場合は0.5ダーム分が割り当てられる。

アルナー⁶⁸（ハムザのファトゥハ、ラーのスクーン、ヌーンのファトゥハ、書かれただけのハー）と呼ばれる雄の水牛は小麦粉の粥8スィール、2スィールの黄色油脂、0.5スィールの黒砂糖、1.5スィールの穀粒、2ダーム【相当】の飼い葉を割り当てられる。若い間は驚くべき戦いぶりを示し⁶⁹、獅子を打ち負かすほどである。そのような力強さが保たれなくなると、第二の等級に位置付けられ、水運び（saqqā'i）の仕事に就く。8スィールの穀粒と飼い葉用に2ダームが割り当てられる。また、水汲み⁷⁰用の水牛には6スィールの穀粒と2ダーム【相当】の飼い葉が割り当てられる。

チャター運搬用の車両（‘arābah-’i čitah⁷¹）を引く選りすぐりの牛は6.25

68 arnah. なおヒンディー語のarnāは野生の水牛（*Bubalus bubalis*）を意味する。またその雌をarnīという [Platts 1884: 41b; 古賀・高橋 2006: 52a]。 (W)

69 宮廷で行われた動物同士の試合に水牛が参加していたことについては、本書に後出すとおりである [AA: I, 165]。 (M)

70 āb-kišiは本書の既出箇所 [AA (Jtr.) (4) : 41; AA (Jtr.) (13) : 17-18] ではいずれも「水運び係」と訳したが、ここでは上出のsaqqā'iを「水用の皮袋 (siqā) を積んだ荷車を引いて運ぶ仕事」を指す一方で、āb-kišiは井戸から水を汲み上げる「水汲みの仕事」と解した。また、この仕事に従事する動物について、Blochmannは“Female buffaloes”であると訳し、上述の雄のアルナーに対置させて解釈する [AA (Etr.) : I, 158]。この点についてBlochmannは根拠を示していないが、ヒンディー語で雌のアルナーを別名 (arnī) で呼ぶことを考慮に入れたためかと思われる [本訳注68参照]。しかし、本書ではアルニー（あるいは雌の水牛）を明示する語は記されておらず、他方で用途により牛の餌の量が違うとの記述がこの直後にも見られることから、アルナーとは別種の（あるいはアルナーに限定されない）水汲み用に用いられる水牛を指すと解した。なお、*Bābur Nāmah*には北インドで見られた井戸からの水汲みについて2種類の方法（「ベルシア式揚水機」と「車井戸」）が述べられているが、これらはいずれも牛の力を利用する [BN: 439-440; BN (Jtr.) : 443]。 (W)

71 čitahは西アジアで古くから狩猟用に使われてきたyüzと同じで、これを馴らして狩

スィールの穀粒を、またその他の牛は5スィール【の穀粒】を、【そしてどちらも上述の他の牛と】同様に飼葉を割り当てられる。荷運び用の車両（‘arābah-’i bār-kiši）を引く牛については、以前は5スィールの穀粒と1.5ダームが飼葉用に定められていた。現在は【穀粒が】0.25スィール少なくなり、飼葉は従来通りである。

乳を出す牛や水牛は、もし君主のもとにいるなら【各々が出す】乳の重量に応じて穀粒を割り当てられる。これらの牛や水牛の群れはタート（ihāt⁷²）（ヒンド語の上双点付きター、隠れたハー、アリフ、ヒンド語の上双点付きター）と呼ばれる。それぞれの牛が1日あたり1スィールから15スィールの乳を出し、水牛が2スィールから30スィールの乳を出す。パンジャープの水牛はより優れている。まずそれぞれの牛の乳の量が確定され、その上で1スィール【の乳】につき2ダームの油脂が課される。

【牛舎の】奉仕者たちの規則

御用の牛舎においては、4頭ごとに1人の世話係が任命される。そのうち18人が第一の牛舎で【働き】1日あたり5ダームが、その他の者たちには4ダームが割り当てられる。その他の牛舎では同じ【1人4ダームの】手当だが、各人が6頭の牛の世話をする。バハル車係たち（bahalbān-ān）は一部がアハディーとして月給を受ける。また、【アハディーではないバハル車係の】一部の者については360ダーム、その他の者たちについては112ダームから256ダームまで【の月給】である。バハル車は2種類に分けられる。4本以上の柱を備

猟に使用してきたことについては、[AA (Jtr.) (6) : 16, n. 65] を参照。また、yūz を使った狩猟については本書でも後述されている [AA: I, 206-207]。(W)

一対の牛によって牽引される二輪車両に狩猟用のチーターが搭載されている様子を描いた *Akbar Nāmāh* の写本挿絵がある (Chester Beatty Library, In03, f. 155v)。(M)

⁷² ヒンディー語で *ihāt* あるいは *ihai* で「群衆、集団、集合」を意味し、特定の動物に対する用語ではないが [Platts 1884: 362a; 古賀・高橋2006: 545a]、ここではとくに牛や水牛の群れを指すとされている。(W)

えた覆い付きのものと、それ以外である。また頑丈な馬が牽くものもあり、それをグルバハル⁷³（ペルシア語のカーフのダンマ、隠れたハー、ラーのスクーン、バーのファトゥハ、ハーとラームのスクーン）と言う。

10台の車両に20人の車両係と1人の大工が任命される。【車両係の】十人頭と大工は1日あたり5ダームを、その他の者たちは4ダームを得る。しばらくの間、【車両係には】15人が任ぜられており、大工は外されていて、車両係は自分自身で【大工仕事を】済ませ、毎年修理のために2200ダームが支払われることになっていた。

もし【牛の】角が割れたり、目が見えなくなったりしたら、【その牛の】価格の1/4がダルガから取り上げられるが、損害の程度により増減することもある。

かつてダルガは修理費を自分で賄っていた。ただし、移動日には車両1台につきウング⁷⁴（ハムザのダンマ、ワーウのスクーン、隠れたヌーン、ペルシア語のカーフ）のために1/2ダームが与えられていた。ウングとはサン⁷⁵に黄色油脂を付けて、車軸となっている心棒に巻きつけて、すり減ったり壊れたりしないようにするためのものである。車両係たちにダルガの業務が割り当てられたので、この費用も彼らは自ら賄うことになった。

進軍の際にはダルガが宮内作業所の用具類の一部を運ぶ慣わしだった。【その後】車両係たちに任されたダルガの仕事として、薪として使われるものと天幕の建材<I, 152>【の輸送業務】も車両係たちに追加された。その後、200台の車両が天幕の建材のために割り振られ、別の600台が150,000マンの薪を

73 本文の「読み」に従えばghur-bahlだが、ヒンディー語ではghur-bahalで馬が引く4輪の車両を指す [Platts 1884: 933a-b]。bahalについては本訳注64を参照。ghur-はヒンディー語で馬を意味するghorāの短縮形で、合成語を構成する際の要素である [古賀・高橋 2006: 378a]。Akbarについては、グジャラート遠征の際に馬やラクダの他にghur-bahalも使って移動したとJNが伝えるほか [JN (T) : 24]、Monserrateも、Akbarが二頭立ての馬車を使用しており、自身でも御することがあったと述べている [Monserrate (Etr.) : 164, 240; Monserrate (Jtr.) : 89, 181]。(W)

74 üng。ヒンディー語では、動詞ünghnāに、荷車や車両の車軸に油を注すという意味がある [Platts 1884: 108b]。(W)

75 サンという植物については本書で既出であり、この木の皮で柔らかい縄がつくられることについても言及がある [AA (Jtr.) (6) : 37; AA (Jtr.) (12) : 16, n. 74]。(W)

10ヶ月にわたって厨房に届けることになった。王権の仕事に係る者たちがそれ以外の業務に車両を充てる場合、その日は【車両係の勤務日として】勘定される一方、荷役のお勤めは当初のとおり【勘定される】。

【車両係は】パーオ・ゴーシュトの責務からも免ぜられることになったが⁷⁶、牛が死んでしまったら自分で代わりを連れてこなければならない。【上記の本来業務外の仕事のごとく】賃料を受けての業務 (iğrah) が、おとなしく仕事をこなすこの動物の虐待の源であるという話が吉兆なる御耳に達したところ、【陛下はその牛をその車両係から】引き離し、幸運をもたらし奉仕者【たる牛の世話係】たちの一部に改めて委ねられたことがある。

【さらに運用の変更が行われた結果】車両用の牛たちの穀粒は4スィール、飼い葉のために1.5ダームになった。その他の牛の分はその半分になった。雨季の4か月は飼い葉の費用が減額された。また、18台の車両に20人が割り当てられ、そのうちの1人は大工仕事に通じていることとされた。また死んだ牛については至高の政府により交換されることになっている。またウーングと修理についても宮廷が【費用を】負担することになっている。

また、服務している牛については年に1度、正しき行いの検査官たちが太り具合と痩せ具合を測る。服務していない牛については6ヶ月ごとに測る。【後者の牛は】上述した薪その他の【運搬の】代わりに、何であれいと高き宮廷により割り当てられたお勤めに従事する。

ラバ舎の規則

ラバには馬の力とロバの辛抱強さがあり、前者の賢さには及ばないが、後者ほどの愚かさもなく、かつて通った道なら迷わない。このことから、全てに行き届き物事を知る御方はラバを好み、飼育しておられる。荷運び、急勾配の登

⁷⁶ 牛が牽引する車両の車両係が *pāw-gūšt* の規則による罰金から免責されることについては、後出するその規則の記述のとおりである [AA: I, 164]。 (M)

坂、従順さにおいて並ぶものはほとんどない。巷の人々は、【雄の】ロバを雌馬と掛け合わせると言うが、古の諸書に記されている通り、【ロバと馬の性別が】逆でもラバは生まれる⁷⁷。母親により強く似る。世界の王が若い雄ロバを雌馬と掛け合わせたところ、選りすぐりのラバが生まれた。

多くの国々で、公正でものを知る人々はこの動物に乗っていたものだった。【そのおかげで】虐げられたものたちが心の苦しみを容易に訴えることができたし、道行く人々がますます安んじていられたものだった。

ラバは、インドの国ではバクライ⁷⁸とその周辺以外では産しない。このくにの善き人々は【ラバを】ロバと考え、それに乗るのを恥とみなしてきたけれども、聖なるご配慮により、そのような嫌悪はもはや残っていない⁷⁹。【ラバは】イラーキ・アラブとイラーキ・アジャムやその他の場所から連れてこられ、選りすぐりのものは1000ルピーで買われることもある。その隊列はラクダ同様5頭からなり、2番目のものが上手 (*bardast*) と呼ばれる以外は同じ名前で呼ばれる⁸⁰。この動物の生来の寿命は50年である。

77 現代は、雌ロバと雄馬の組み合わせから生まれた動物は、ケッティなどラバとは異なる名称で呼ばれることもある。(N)

78 *Pakhlai. Hindūstān* から *Kaśmīr* への途上に位置するサルカール。本書の地誌部分での説明の中ではラバには触れていない [AA: I, 562, 585]。(N)

79 インドの人々がロバに乗ることを屈辱と考えており、また罪人がロバに乗せられていたことは *Ibn Baṭṭūṭah* が伝えている [IB: III, 441; IB (Jtr.): V, 348]。 *Ibn Baṭṭūṭah* は、*Muḥammad Tuḡluq* が馬と共にラバを飼育していたことや、ラバ曳き (*zammālat*) の集団がいたことにも触れている。 *Firūz Šāh Tuḡluq* 時代には、デリーでの移動手段の一つとしてラバが用いられていた [IB: III, 353; IB (Jtr.): V, 234; TFSA: 135]。家臣や外来の商人からのスルターンへの贈り物や、 *Ibn Baṭṭūṭah* がサドル・ジャハーンに送った物品の中にもラバが見られる [IB: III, 244, 342, 442; IB (Jtr.): V, 72, 224, 350; TFSA: 268]。 *Gulbadan* や *Gawhar Aftābači* は、 *Humāyūn* 時代にもラバ (*astar*, *ḥaččar*) が駄獣あるいは馬とともに贈り物として利用され、また *Humāyūn* に御用 (*ḥaṣṣah*) のラバがいたことを伝えている [HN: 28, 58, 68; HN (Jtr.): 65, 113, 129 (ただし、訳文は *astar* をラクダとしている) ; TW: 112, 121, 136]。(N)

80 ラクダの隊列についての記述は本訳注22頁に既出である [AA: I, 146]。(N)

飼料⁸¹。インド産でないものは6スィールの穀粒⁸²と、御前にある場合は2ダーム分、それ以外なら1.5ダーム分の飼い葉。インド産のものは、4スィール【の穀粒】と、御前にある場合は1.5ダーム、それ以外の場合は1ダーム分の飼い葉。塩のために、毎週3.5ジェータル⁸³。【塩は】ラバを集めて食べさせる。

装備⁸⁴。【外国産のラバ用には】革製の轡 (*čarmīn nuḥṭah*) が20と1/4ダーム。2スィールの鉄製の鎖が10ダーム。革製のしりがい (*rānaki-’i čarmīn*) が4ダーム。<I, 153> 荷鞍 (*pālān*) が102ダーム。ショールでできた腹帯 (*šāl tang*) と毛織物製の腹帯 (*palās tang*) が36と1/4ダーム。強繩⁸⁵が63ダーム。短鞭⁸⁶が6ダーム。一隊列に鈴1つが10ダーム。毛の織物の胴衣⁸⁷が40ダーム。革製のキラワーが13ダーム。一式の繩⁸⁸が9ダーム。フェルトが4と1/4ダーム。頭覆いが4ダーム。鞍袋 (*ḥurḡin*) が15ダーム。飼葉袋が4ダーム。革製の蠅払いが1ダーム。馬櫛とハッティ⁸⁹が4ダーム。全部で345と3/4ダームであ

81 底本は行を改めて、「飼料の規則」 *ā’in-i ḥwurāk* という節題としてテキストを作るが、A写本、B写本、C写本全てにおいて「規則」 *ā’in* の語は見られず、改行も行われていない [AA Ms. A: 73r; AA Ms. B: 72r; AA Ms. C: 63r]。 (N)

82 *dānah*. 本訳注の馬に関する記述では、この語は馬の餌としては豆を意味すると解釈した [AA (Jtr.) (12) : 6, n. 25]。 (N)

83 原文は *sih wa nim baḥš-i dām* である。*baḥš-i dām* はダームの単位 (1/25ダーム) であるジェータルを意味すると解釈し、このように訳した。ダームを1/25の単位で細分する用例は本書に既出である [AA (Etr.) : I, 161; AA (Jtr.) (13) : 10, n. 39]。 (N)

84 底本は行を改めて、「装備の規則」 *ā’in-i raḥt* という節題としてテキストを作るが、B写本、C写本には「規則」 *ā’in* の語は見られず、改行も行われていない [AA Ms. B: 72r; AA Ms. C: 63r]。 (N)

85 *ṭāqah ṭanāb*. ラクダの装具の部分で、荷物を縛るための綱と説明されている。Richardson は *ṭāqah* の語釈として *a heap or bundle* を挙げる [AA; I, 148, Richardson 1829: 961]。 (N)

86 底本は *qatir šallāq* とするが、全ての写本において *qantar šallāq* である [AA Ms. A: 73r; AA Ms. B: 72r; AA Ms. C: 63r]。 *qatir* は *qātir*、*qāṭir* などとも綴られ、ラバを意味するトルコ語と推察される [Doerfer: III, 391-393]。 *qatir* という語は文脈に沿って復元された可能性が高いと判断し、写本に従い短鞭とした。なお、Blochmann は *qātir shallāq* と転写し、*short whip* と訳している [AA (Etr.) : I, 161]。 (N)

87 *mū’in ḡul*. Blochmann は、*horse hair saddle* (馬の毛製の鞍?) と訳している [AA (Etr.) : I, 161]。 (N)

88 *radah-’i rismāni*. Blochmann は、*a set of ropes* と訳している [AA (Etr.) : I, 161]。 (N)

89 *hatthi*. 本書第二部の軍用馬に関する記述の中で、「馬の尾の毛で作られた、【馬を】

る⁹⁰。

インド産のもの【の装備】は【全部で】151と1/4ダームである。革製の轡が4ダーム。荷鞍が51ダームと18 3/4分⁹¹。2種類の腹帯が16.5ダーム。強綱と頭覆いが40ダーム。鈴が5ダーム。飼葉袋が3ダーム。しりがいが3ダーム、胴衣が24ダーム。馬櫛とハッティーが4ダーム。

3年ごとに装具 (yarāq) が新調される。古い鉄製品や木製品は、価格の半分を差し引かれる。装具の修理のため、その1年の後に40ダームが支給される。行軍中には、古び具合に応じて新調する。蹄鉄は6ヶ月で付け【替え】、その都度8ダームが与えられる。

一隊列を一人が管理する。トゥーラーン人 (Tūrānī) あるいはイーラーン人 (Īrānī) あるいはインド人 (Hindī)⁹²が世話係に任じられる。最初の2集団の月給は400ダームから1920ダームまでである。3番目は240ダームから256ダームまでである。月給10ルピー【400ダーム】以上の者は皆、ピーシャング⁹³の飼い葉と穀粒を自ら用意しなければならない。年に2回、検査官が太り具合や痩せ具合を確認し、年に1回は聖なる閲覧にかける。【ラバが】盲目やびっこになったら【月給の】1/4がラバ番から取られる。死なせてしまったら2倍 (dah bīst) 【月給2ヶ月分】である⁹⁴。

きれいにするための袋」と説明されている [AA: I, 176]。ウルドゥー語では、馬などのブラッシングに用いる手袋あるいはブラシを意味する [Platts 1884: 1219b]。(N)

⁹⁰ この数値は、本文中で示された装具の価格の合計と合致する。(N)

⁹¹ ここでは「部分」を意味する *ḥiṣṣah* という語が用いられている。*ḥiṣṣah* をジェータルと同義と考えると、この値は3/4ダームに相当する (1ダーム=25ジェータル、18 3/4 ジェータル=0.75ダーム)。それに基づきここに挙げられている用具の価格の合計額を計算すると、151 1/4ダームとなる。(N)

⁹² ここでは、外国産のラバは外国人が、インド産のラバはインド人が世話をしていたという含意があると推察される。ただし、ムガル帝国時代の史料においては、人間の属性を示す言葉として *Tūrānī*、*Īrānī*、*Hindī* という表現が用いられることは稀である。(M)

⁹³ 5頭からなる隊列の先頭の呼称。ラクダの規則で既出である [AA: I, 146; 本訳注22頁]。(N)

⁹⁴ 軍用動物に生じた損耗について担当官や職員が負うべき罰金については、給料ベースで算出される場合と、当該の動物の価格ベースで算出される場合とがある [AA: I, 139-140, 145; AA (Jtr.) (12) : 21-22; AA (Jtr.) (13) : 21]。本記事の場合、動物の価格ベースと解釈すると、死亡時の罰金が価格の2倍という過大な数値となるため、給

荷運びや水汲みのためにロバも飼われている。穀粒3スィールと、飼い葉のために1ダームが与えられる。装備はインド産のラバと同様だが、胴衣は与えられない。年に23ダームが【装備の】修理のために与えられる。ロバの世話係【の給与】は120ダーム以下である。

参考文献

一次文献

- AA: Abū al-Faḍl, *Ā'in-i Akbarī*. H. Blochmann (ed.), 2 vols., Calcutta, 1867-1877.
AA (Etr.): do. H. Blochmann (vol. 1) & H. S. Jarrett (vols. 2, 3) (trs.) (Rev. ed. D. C. Phillott & J. Sarkar), Calcutta, 3 vols., 1927-1949.
AA (Jtr.) (1): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (1)」『紀要』(神戸大学文学部) 40, 2013, pp. 69-118.
AA (Jtr.) (3): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (3)」『紀要』(神戸大学文学部), 42, 2015, pp. 113-151.
AA (Jtr.) (4): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (4)」『紀要』(神戸大学文学部), 43, 2016, pp. 35-73.
AA (Jtr.) (6): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (6)」『紀要』(神戸大学文学部), 45, 2018, pp. 1-44.
AA (Jtr.) (10): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (10)」『紀要』(神戸大学文学部) 49, 2022, pp. 57-98.
AA (Jtr.) (12): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (12)」『紀要』(神戸大学文学部) 51, 2024, pp. 1-24.
AA (Jtr.) (13): 二宮文子・真下裕之・和田郁子訳注「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』 訳注 (13)」『紀要』(神戸大学文学部) 52, 2025, pp. 1-28.
AA Ms. A: Ms. Add. 7652, British Library.
AA Ms. B: Ms. Or. 2169, British Library.
AA Ms. C: Ms. Add. 6552, British Library.
AAB: Asad Beg Qazwīnī, *Aḥwāl-i Asad Beg*. Ms. Fann-i Sawānīḥ-i 'Umri 41, Andhra

料ベースで書かれていると判断した。なお、Blochmannは価格ベースの算出と解釈した上で、前者をラバの価格の4分の1、後者を2分の1と訳しているが、他の箇所では *dah bist* を一倍半と訳しており、解釈に一貫性がない[AA (Etr.): I, 141, 162; AA (Jtr.) (13): 5, n. 22]。(N)

- Pradesh Government Oriental Manuscripts Library and Research Institute.
- AlmN: Muḥammad Kāzīm, *‘Ālamgīr Nāmah*. Ḥādīm Ḥusayn & ‘Abd al-Ḥayy (eds.), Calcutta, 1865-1868.
- AN: Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*. Mawlawī Āgā Aḥmad ‘Alī & Mawlawī ‘Abd al-Raḥīm (eds.), 3 vols., Calcutta, 1877-1886.
- AS: Muḥammad Ṣāliḥ Kanbū Lāhawrī, *‘Amal-i Ṣāliḥ*. Ġulām Yazdānī (ed.), 3 vols., Calcutta, 1914-1939.
- Bernier: François Bernier, *Voyages de François Bernier docteur en medecine de la faculte de Montpellier*. F. Tinguely, A. Paschoud & Ch.-A. Chamay (eds.), *Un libertin dans l’Inde Moghole: Les voyages de François Bernier (1656-1669)*, Paris, 2008.
- Bernier (Jtr.): 関美奈子・倉田信子訳『ムガル帝国誌』岩波書店、1993.
- BN: Bābur, *Bābur Nāmah*. (Ed.) 間野英二『パープル・ナーマの研究 I』松香堂 1995.
- BN (Jtr.): 間野英二『パープル・ナーマの研究 III 訳注』松香堂 1998.
- BNL: ‘Abd al-Ḥamīd Lāhawrī, *Bādšāh-Nāmah*. Kabīr al-Dīn Aḥmad & ‘Abd al-Raḥīm (eds.), 2 vols., Calcutta, 1866-1868.
- BNW: Muḥammad Wārīṭ, *Bādšāh-Nāmah*. Ms. British Library, IO Islamic 324.
- Fitch: Ralph Fitch, (The voyage of M. Ralph Fitch marchand of London). W. Foster (ed.), *Early Travels in India, 1583-1619*, London, 1921, pp. 8-47.
- HI: Amīn Aḥmad Rāzī, *Haft Iqlīm*. Ġawād Faḍīl (ed.), 3 vols., Tihārān, n.d.
- HN: Gul-badan Bigim, *Humāyūn Nāmah*. A. S. Beveridge (ed. & tr.), London, 1902.
- HN (Jtr.): do. 間野英二訳『フマーユーン・ナーマ』平凡社、2023.
- IB: Ibn Baṭṭūṭah, *Tuḥfat al-Nuẓẓār fī Ḡarā’ib al-Amṣār wa ‘Āḡā’ib al-Asfār*. C. Defrémery & B. R. Sanguinetti (eds. & trs.), *Voyages d’Ibn Battūṭah*, 4 vols., Paris, 1853-1879.
- IB (Jtr.): do. 家島彦一訳『大旅行記』平凡社、8 vols., 1996-2002.
- JN (T): Nūr al-dīn Muḥammad Ḡahāngīr, *Ḡahāngīr Nāmah*. Muḥammad Hāšīm (ed.). Tihārān, 1359 Sh.
- Monserate (Etr.): Anthonio Monserate, *Mongolicae Lagationis Commentarius*. João Vicente Melo & Lena Wahlgren-Smith (trs.) *The Writings of Antoni de Montserrat at the Mughal Court*. Leiden & Boston, 2023.
- Monserate (Jtr.): do. 清水廣一郎・池上岑夫訳「ムガル帝国誌」『ムガル帝国誌・ヴィジャヤナガル王国誌』岩波書店、1984, pp. 3-223.
- Mundy: Peter Mundy, *Itinerarium Mundii, that is, A Memoriall, or, Sundry Relations of Certain Voïages Journeies ettc*. R. C. Temple & L. M. Anstey (eds.), 5 vols., in 6, Cambridge & London, 1907-1936.
- NZJ: Muṭribī Samarqandī, *Nuṣṣah-i Zībā-yi Ḡahāngīrī*. Ismā’il Bayg Ḡānūf & Sayyid ‘Alī

- Mūḡānī (eds.), Qum, 1377 Sh.
- SDA: Y. H. Khan (ed.), *Selected Documents of Aurangzeb's Reign, 1659-1706 A. D.* Hyderabad, 1958.
- Steel: Richard Steel, (A Journall of the Journey of Richard Steel and John Crowther). Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes*. IV, Glasgow, 1605, pp. 266-280.
- TFSA: Šams Sirāḡ ‘Afif, *Tārīḡ-i Fīrūz Šāhī*. Mawlawī Wilāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1890.
- THA: Bāyazīd Bayāt, *Taḍkirah-i Humāyūn wa Akbar*. Muḥammad Hidāyat Ḥusayn (ed.), Calcutta, 1941.
- TW: Ġawhar Āftābači, *Taḍkirat al-Wāqi‘āt*. W. M. Thackston (ed.), *Three Memoirs of Humāyūn*. Volume One, Costa Mesa, 2009.
- ZNA: Abū al-Fayḍ Fayḍī, *Ẓafar Nāmah-i Aḥmadābād*. K. A. Nizami (ed.), *Medieval India Quarterly*, 5, 1963, pp. 133-150.

二次文献

- Anwarī, Ḥ. (1381 Sh.) *Farhang-i Buzurg Suḡan*. 8 vols., Tīhrān.
- Blochmann, H. (1868) Contributions to Persian Lexicography. *Journal of the Asiatic Society of Bengal. Part I*, 37 (1), pp. 1-72.
- Brand, M. & Lowry, G. D. (1985) *Akbar's India: Art from the Mughal City of Victory*. New York.
- Bulliet, R. W. (1975) *The Camel and the Wheel*. New York.
- Deloche, J. (1980) *La circulation en Inde avant la révolution des transports*. 2 vols., Paris.
- Han, J. (2014) Wild yak (*Bos mutus* Przewalski, 1883). In: Melletti, M. & J. Burton (eds.), *Ecology, Evolution and Behaviour of Wild Cattle: Implications for Conservation*. Cambridge, pp. 194-215.
- Moosvi, S. (2015) *The Economy of the Mughal Empire c. 1595: A Statistical Study*. Revised and Enlarged Edition. New Delhi.
- Natif, M. (2018) *Mughal Occidentalism: Artistic Encounters between Europe and Asia at the Courts of India, 1580-1630*. Leiden.
- Platts, J.T. (1884) *A Dictionary of Urdū, Classical Hindi and English*. Oxford.
- Potts, D. T. (2004) Camel Hybridization and the Role of *Camelus Bactrianus* in the Ancient Near East. *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 47 (2), pp. 143-165.

- Rajabi, M. A. (2005) *Iranian Masterpieces of Persian Painting*. Tehran.
- Richardson, J. (1829) *Dictionary: Persian Arabic, and English*. London.
- Roy, K. (2014) *Military Transition in Early Modern Asia, 1400-1750: Cavalry, Guns, Government and Ships*. London.
- Shakespeare, J. (1834) *A dictionary, Hindūstānī and English*. London.
- Spooner, B. (Elr), Baluchistan i. Geography, history and ethnography. *Encyclopaedia Iranica*. Encyclopedia Iranica Foundation (<https://www.iranicaonline.org/articles/baluchistan-i/>).
- Steingass, F. (1892) *A Comprehensive Persian-English Dictionary*. London.
- Tapper, R. (2013) One Hump or Two? Hybrid Camels and Pastoral Cultures, An Update. Emery, E. (ed.) *Camel Cultures: Historical Traditions, Present Threats, and Future Prospects. Selected Papers from the Camel Conference @ SOAS*. London. pp. 149-162.
- 古賀勝郎・高橋明 (2006) 『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店.
- 馬場多聞 (2021) 「中世のイエメンとギーとインド洋西海域」『嗜好品文化研究』6, pp. 73-81.
- 堀内勝 (2015) 『ラクダの跡：アラブ基層文化を求めて』第三書館.
- 堀内勝 (2024) 『ラクダの文化誌：アラブ家畜文化考』法蔵館 (初版：リプロポート, 1986).
- 真下裕之 (1999) 「Akbar Nāmah と Ṭabaqāt-i Akbarī : manṣab 制度史研究序説」『西南アジア研究』51, pp. 43-74.
- 家島彦一 (1991) 『イスラム世界の成立と国際商業：国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店.